

9	尾北	扶桑町立山名小学校	クワハラ リオ 氏名 桑 原 璃 音
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

研究題目

主体的・対話的に学ぶ児童の育成 ―言語活動を通して―

1 主題設定の理由

グローバル化が進展する現代社会においては、多様な文化や価値観をもつ人々と主体的に関わり、互いの考えや思いを伝え合いながら協働していくことが求められている。小学校外国語教育では、外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力の育成を通して、自らの考えや気持ちを主体的に表現し、相手と対話しながら理解を深めていく力を育むことが重要である。それらを実現するために、言語活動を充実させることが求められている。

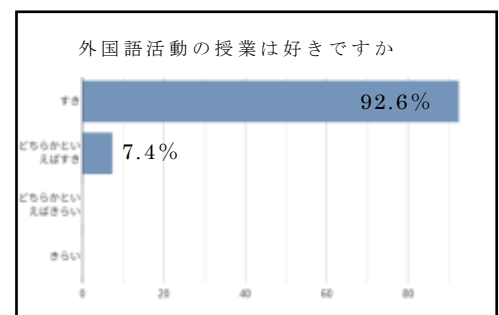
小学校学習指導要領では、「言語活動を行う際は、単に繰り返し活動を行うのではなく、児童が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定することが必要である」と示されている。本研究では、「言語活動」を、児童が相手意識や目的意識をもちながら、自分の思いや考えを外国語で伝え、相手の思いや考えを受け止めることで、互いに関わり合うコミュニケーション活動であると捉えた。

しかし、児童の中には、伝えたいことがあっても、どのような表現を用いて伝えればよいか分からず、発話をためらう姿が見られる。また、既習表現を知識として理解していても、実際のコミュニケーションの場面で活用できていない実態も見られる。以上のことから、既習表現や新たに学習する表現を活用することができる言語活動を意図的に設定し、児童が伝え合う楽しさや達成感を味わいながらコミュニケーションを図る経験を積み重ねることで、主体的・対話的に学ぶ児童を育成したいと考え、本研究主題を設定した。

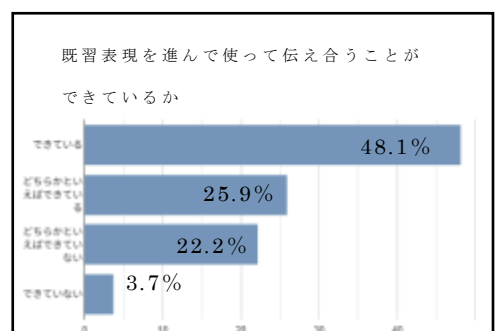
2 児童の実態

本研究を始めるに当たって、本校3年生54名を対象に外国語活動の学習に関するアンケート調査を実施した。「外国語活動の授業は好きですか」という質問に対して、「好き」と回答した児童は92.6%、「どちらかといえば好き」と回答した児童は7.4%であった（資料1）。このことから、対象の児童は外国語活動に対して高い関心をもち、意欲的に学習へ取り組んでいることが分かる。また、英語を用いて友達と関わったり、コミュニケーションを図ったりする活動に対しても前向きな姿勢をもっていると考えられる。

一方、「既習表現を進んで使って伝え合うことができますか」という質問に対しては、「できている」と回答した児童が48.1%、「どちらかといえばできている」が25.9%であった。その反面、「どちらかといえばできていない」と回答した児童は22.2%、「できていない」と回答した児童は3.7%であり、約4分の



【資料1 アンケート結果5月】



【資料2 アンケート結果5月】

1の児童が既習表現を活用して伝え合うことに難しさを感じていることが分かった（資料2）。

これらの結果から、対象の児童は外国語活動そのものに対しては高い興味・関心をもっているものの、学習した表現を実際のコミュニケーションの場面で主体的に活用することには課題があることが分かった。外国語活動を楽しみながらも、自信をもって発話したり、自ら進んで既習表現を用いたりすることが十分にできていない児童もいると考える。

3 研究の方法

(1) 目指す児童の姿

既習表現や新たに学習した表現を積極的に活用し、自分の思いや考えを相手に伝えたり、相手の思いや考えを聞いたりしながら、主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童

(2) 研究の仮説

- ① 授業の中で、既習表現や新たに学習した表現を用いたミニゲームを行ったり、目的や相手、場面を意識した言語活動を行ったりすることで、それらを活用しながら進んで相手と伝え合うことができるであろう。
- ② 評価の観点を事前に示し、活動後に振り返りを行うことで、児童は自分の成長やできるようになったことを実感し、自信をもってコミュニケーションを図ろうとすることができるであろう。

(3) 具体的な手立て

- ① 既習表現や新たに学習した表現を取り入れたミニゲーム
語句や表現に繰り返し触れる活動や、スライドを用いて自分の思いや考えを伝え合う活動を取り入れることで、表現への理解を深めるとともに主体的にコミュニケーションを図ろうとする。
- ② 目的や相手、場面を意識した言語活動の充実
児童が「誰に」「何のために」伝えるのかを明確にした言語活動を設定することで、相手に伝える必要感をもち、学習した表現を用いながら活動する。
- ③ 活動後の振り返り
評価基準を事前に示し、活動後に児童が自分のできたことやできるようになったことを振り返ることで、自らの成長を実感し、自信をもって交流しようとする。

4 実践と考察

(1) 実践

- ① 既習表現や新たに学習した表現を取り入れたミニゲーム
既習表現や新たに学習した表現を活用することができるよう、授業の導入にミニゲームを取り入れた。児童が楽しみながら語句や表現に繰り返し触れ、友達との交流を通して自然に表現を用いることをねらいとしている。ここでは、2つのミニゲームについて述べていく。1つ目は、1～20までの数字の言い方に慣れ親しむことを目的として、ナンバーゲームを行った。児童が友達と楽しみながら数字を繰り返し発話することで、語句の定着を図ることができると考えた。また、時間内にできるだけ多くの友達と交流することを目標とすることで、特定の友達だけでなく様々な友達と進んで交流しようとする姿を期待した。

<活動内容>

- ① 10本の指の中から数本選び、「1・2」の合図の後に指を出す。

- ② ペアの子が出した指の数と自分の指の数を足す。
- ③ 英語で合計の数を言う。

活動当初は、数字を英語で発話することに戸惑い、日本語で数え直したり友達に尋ねたりする姿が見られた。しかし、活動を繰り返すうちに数字の言い方に慣れ、自信をもって発話する児童が増えた。特定のペアだけでなく、いろいろな友達と交流することで、児童は自然に数字を聞いたり話したりする機会を重ねることができた。また、活動後には身の回りにある物の数を英語で数えたり、友達同士で数を伝え合ったりする姿も見られた。

2つ目は、「I like ～.」の表現に慣れ親しみ、自分の好きなものを英語で伝えることができるようにするために、マッチングゲームを行った。本活動では、児童が楽しみながら繰り返し「I like ～.」の表現を用いることで、語句や表現の定着を図ることをねらいとした。また、友達と同じものを選んだときに喜びを共有したり、異なるものを選んだときに反応を返したりすることで、相手との関わりを楽しみながら活動できるようにした。

<活動内容>

- ① モニターに映し出された画像の中から1つ好きなものを選ぶ（資料3）。
- ② 選び終わったら、ペアと背中合わせになるように向きを変える。
- ③ 「1、2」の合図で正面を向き、息を合わせて「I like（選んだもの）.」と答える。
- ④ 同じものを選んでいたらハイタッチをし、別のものであれば残念な表情をするなど、リアクションをする。

活動当初は、教師の後に続いて発話したり、友達の様子を見ながら発話したりする児童も見られた。しかし、導入時に継続して取り組むことで、「I like 〜.」の表現に慣れ、自信をもって交流する児童が増えていった。また、同じものを選んだ友達とハイタッチをしたり、異なるものを選んだ友達と笑顔でやり取りをしたりする姿も見られ、活動を楽しみながら表現を用いていた。その後、自分の好きな食べ物や色を伝える言語活動では、教師の支援を必要とせず、自ら「I like strawberry.」「I like blue.」などと進んで伝え合う児童が多く見られた。

【資料 3 モニターに映し出す画像の例】



【資料 3 モニターに映し出す画像の例】

- ② 目的や相手、場面を意識した言語活動の充実

Let's Try! 1 Unit 4 「I like blue.」は、自分の好きなものや苦手なものを相手に伝えたり、相手のことを知ったりすることを通して、コミュニケーションを図ることをねらいとした単元である。そこで、教師と ALT が児童のことをもっと知りたいと思っているという場面を設定し、自分の好きなものや苦手なものを知ってもらうために、実際に教師や ALT に伝える言語活動を行った。活動では、教科書に付属している単語カードを活用して紹介カードを作成し、それを基に発表を行った。児童は、自分が好きなものや苦手なものを選びながら紹介カードを作り、教師や ALT に伝えることを意識して発表の準備を進めた（資料 4）。その結果、多くの児童が相手の目を見ながら、「I like ～.」や「I don't like ～.」



【資料 4 紹介カード】

を用いて、自分の好きなものや苦手なものを伝えることができた。また、教師やALTからの「Do you like blue?」などの質問に対しても、「Yes, I do.」や「No, I don't.」と応答する姿が見られた。さらに、発表後には友達同士で好きなものを英語で紹介する児童もいた。

Let's Try! 1 Unit 5「What do you like?」では、相手の好きなものを尋ねたり答えたりしながら、互いのことを知ることを行っていた。そこで、「あなたはシェフです。ペアの子が喜びそうなオリジナルパフェを作ろう」という場面を設定した。児童は、ペアの友達に喜んでもらうために、好きな果物や色を尋ね、その内容を基にオリジナルパフェを考える言語活動を行った。活動では、児童がシェフ役となり、「What fruit do you like?」や「What color do you like?」などの表現を用いてペアの友達に質問をした。そして、相手の回答を聞き取りながら、相手が好きな果物を使ってオリジナルパフェを作成し、相手の好きな色でパフェの下に敷くクロスの色を塗った（資料5）。



【資料5 オリジナルパフェ】

単に質問に答えるだけでなく、相手が喜ぶパフェを完成させるという目的があったため、児童は相手の話をよく聞きながら活動に取り組んでいた。その結果、多くの児童が進んで相手に質問をしたり、相手の回答を確認したりする姿が見られた。また、完成したパフェを見せ合う際には、「I like strawberries!」「Thank you.」など、学習した表現を活用しながら交流する様子も見られた。活動後には、「相手の好きなものが分かった」「友達が喜んでくれてうれしかった」と話す児童もおり、相手意識をもってコミュニケーションを図ることができていた。

③ 活動後の振り返り

授業のはじめにA～Cの評価基準を提示し、本時において自分が目指したい姿を明確にできるようにした。事前に評価基準を示すことで、児童は活動の見通しをもちながら学習に取り組むことが出来た。

また、「Aを目指して頑張りたい」「たくさんの友達と交流したい」など、自分なりの目標をもって意欲的に活動に取り組む姿が見られた。活動後には、スプレッドシートやPadletを活用して振り返りを行った。振り返りでは、本時にできたことやできるようになったことを記録するとともに、A～Cの自己評価を行った。その結果、児童は自分がどの程度目標を達成できたのかを振り返ることができていた。また、「好きなものや嫌いなものが前よりもすらすら言えるようになりました」「好きなものは何?と英語で言えるようになりました」など、自分の成長を具体的に記述する姿もみられた（資料6）。さらに、スプレッドシートやPadletを用いることで、仲間の振り返りを閲覧できるようにした。仲間の頑張りがけや気づきを知ることで、自分とは異なる考え方に触れたり、自分の学習を見つめ直したりする姿が見られた。

6月27日

A

今日はコナンのミッションの、8個の問題を解く事は、できなかったけど、10人いじょうの人に、聞くことができました。そして、今日できるようになったことは、好きなものや、嫌いなものがこの前よりも、すらすら言えるようになりました。あと、好きなものは何?と、英語で言えるようになりました。良かったです。

【資料6 振り返り】

(2) 考察

① 既習表現や新たに学習した表現を取り入れたミニゲーム

授業の導入において継続的にミニゲームを取り入れたことで、児童は既習表現や

新たに学習した表現に繰り返し触れることができた。その結果、学習した語句や表現を自然に用いることができる児童が増え、言語活動においても進んで英語で交流する姿が見られるようになった。また、活動を楽しみながら行うことで、英語を話すことへの抵抗感が軽減され、自信をもって対話する様子もあった。さらに、「ナンバーゲーム」に取り組んだ際には、「20 より大きい数は英語で何というのか知りたい」といった発言も見られた。このことから、ミニゲームを通して表現に慣れ親しむだけでなく、新たな表現を知ろうとする意欲の向上にもつながったと考える。

② 目的や相手、場面を意識した言語活動の充実

目的や相手、場面を意識した言語活動を設定したことで、児童は伝える必要感をもって活動に取り組むことができたと考える。教師と ALT に自分の好きなものや苦手なものを伝える活動では、「自分のことを知ってもらいたい」という思いをもちながら、学習した表現を活用して伝えようとする姿が見られた。また、オリジナルパフェ作りの活動では、自分がシェフになった気持ちで、「ペアの子が喜びそうなパフェをつくる」という場面を設定したため、相手の好きなものを積極的に質問したり、相手の話をよく聞いたりする様子が見られた。このことから、目的や相手、場面を明確にした言語活動を設定することで、児童は教師に促されて活動するのではなく、自ら進んで表現を活用しながら伝え合おうとしていたことが分かる。さらに、コミュニケーションを図る必要性を実感しながら活動に取り組むことで、主体的・対話的に学習に参加する姿につながったと考える。

③ 活動後の振り返り

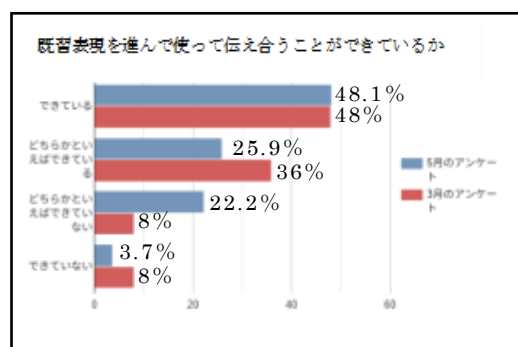
評価基準を事前に提示したことで、児童は本時の目標や目指す姿を意識しながら活動に取り組むことができた。また、「Aを目指したい」と意欲的に学習に向かう姿も見られ、活動の見通しをもつことにつながったと考える。活動後の振り返りでは、自分のできるようになったことや成長したことを具体的に記述する児童も見られた。このことから、振り返りを通して自らの学びを見つめ直し、成長を実感することができていたと考えられる。

一方で、「楽しかった」や「ゲームをもっとやりたい」など、活動の感想のみで終わっている振り返りも見られた。また、自分がどのようなことを学んだのかや、次に生かしたいことについて記述できていない児童もいた。そのため、振り返りを通して学びを整理したり、自らの成長を十分に自覚したりすることについては個人差が見られたと考える。

5 成果と課題

(1) 成果

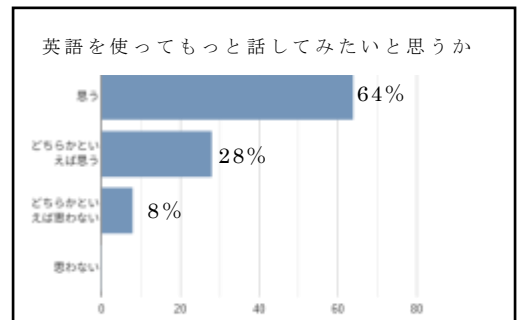
3月中旬の段階で再び、外国語活動の学習に関するアンケート調査を実施した。アンケートでは、「既習表現を進んで使って伝え合うことができますか」という質問に対し、「できている」と回答した児童が48%、「どちらかといえばできている」と回答した児童が36%であり、合わせて84%の児童が肯定的に回答した。研究前のアンケートでは、「できている」「どちらかといえばできている」と回答した児童は74%であったことから、10%増加したことが分かる(資料7)。このことから、既習表現や新たに学習した表現を取り入れたミニゲームや、目的や相手、場面を意識した言語活動を継続的に



【資料7 アンケート結果①】

行ったことで、児童が学習した表現を活用しながら進んで伝え合おうとする姿につながったと考えられる。

また、「英語を使ってもっと話してみたいと思うか」という質問に対しては、「思う」が 64%、「どちらかといえば思う」が 28%であり、92%の児童が肯定的に回答した。一方で、「どちらかといえば思わない」が 8%、「思わない」と回答した児童はおらず、英語によるコミュニケーションに対して前向きな気持ちをもつ児童が多いことが分かった（資料 8）。これは、教師や ALT に自分のことを伝えたり、友達のためにオリジナルパフェを考えたりするなど、目的や相手を意識した言語活動を設定したことで、児童が伝える楽しさや必要感を実感できたためであると考えられる。



【資料 8 アンケート結果②】

以上のことから、既習表現や新たに学習した表現を活用する機会を継続的に設定するとともに、目的や相手、場面を意識した言語活動を充実させることで、児童が主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成につながったと考える。

(2) 課題

本研究を通して、既習表現や新たに学習した表現を活用しながら主体的に伝え合おうとする児童の姿が多く見られた。また、目的や相手、場面を意識した言語活動を設定することで、必要感をもってコミュニケーションを図ろうとする姿にもつながった。

一方で、活動後の振り返りについては課題も見られた。振り返りの中には、「好きなものや嫌いなものが前よりもすらすら言えるようになった」「好きなものは何？と英語で言えるようになった」など、自分のできるようになったことや成長したことを具体的に記述する児童がいた。その一方で、「楽しかった」「またやりたい」など、活動の感想のみで終わっている児童も見られた。今回の実践では、評価基準を事前に示したり、スプレッドシートや Padlet を用いて振り返りを共有したりしたが、自らの学びを振り返り、次の学習につなげるところまでは十分に至っていなかったと考える。今後は、「今日できるようになったこと」「次にがんばりたいこと」など、振り返りの視点をより具体的に示すことで、自らの成長や課題を明確に捉えることができるようにしていきたい。また、本研究では、学習した表現を用いて質問したり答えたりする姿は多く見られたが、対話をさらに深めるという点では課題が残った。例えば、オリジナルパフェ作りの活動では、「What fruit do you like?」と質問し、「I like strawberries.」と答えるやり取りは見られたものの、その後に「Me too.」や「Why?」など、相手の発言を受けて会話を広げる姿はあまり見られなかった。これは、児童が学習した表現を活用して伝え合うことはできるようになってきた一方で、相手の考えや思いに関心をもちながら対話を発展させる段階には十分に至っていないためであると考えられる。さらに、英語を使ってもっと話してみたいと肯定的に回答した児童は 92%であったが、既習表現を進んで使って伝え合うことができていると肯定的に回答した児童は 84%であった。このことから、英語を使いたいという意欲をもっているにもかかわらず、実際のコミュニケーション場面では自信をもてず、発話をためらう児童がいることも考えられる。今後は、既習表現を繰り返し活用できる活動をさらに充実させるとともに、安心して発話できる学習環境づくりにも努めていきたい。

以上のことから、児童が自らの成長を実感しながら主体的に学習に取り組むとともに、相手の考えや思いに関心をもちながら対話を深めることができるように今後も指導の工夫をしていきたい。